

# 風の流氷

【短歌】

楠瀬 兵五郎 選

新春の陽に染めあぐる子の布団明日は帰るといふ電話あり  
 アイディアに溢れし孫の年賀状未来の夢を語るが如く  
 夕映えの西空めざし帰りゆく二羽の鳥か仰ぎ見送る  
 風雪のきびしさに耐え過ごす日々雇用悪化の増しゆく国に  
 粉雪は橿原のさとに白く舞い椿の花のいよいよ白く  
 歳よりも十才若いと言われたり喜ぶべきかなしむべきか  
 頑張ったゆつくり眠つてよいと父死にゆく母を誉めてあげたり  
 冬の日の水やりおそく黄昏にごめんねと鶏に鶏小屋のぞく  
 嬉嬉として空の広さに遊びつつ正月の凧児を従へぬ  
 正月には箏曲「千鳥の曲」を弾く祖母の姿をなつかしみつつ  
 秋深き静かさの中こたつにてひとり思い出にふけりいるわれ  
 延命処置は無用と記す秋暑く鉢の綿の花ほつこりと噴く  
 優しく賢き嫁を得しことは何よりも幸せ妻と語らう  
 吊したる干柿いつかしめりもち雨の近づく日暮の早し  
 我が夫は子鯨たくさん釣れたるが一匹たりとも料理せなかに  
 うす暗き展示場に並ぶみ佛ら中に釈迦牟尼ほほ笑み給ふ  
 農地委託年毎に増え後継もままならず農機・施設は眠る  
 常用の漢字となりし鬱の字にかいま見ゆるか厳しい世相  
 ゆるやかに千の風吹く北の嶺まはれまはれよ風力発電  
 廃校の金次郎像年木負い本を読みよみ何処行きにし  
 合唱を聞く人になり見上げればステージに映え皆美しく

山崎 貴子  
 谷内 務  
 吉本 悦子  
 公文 千恵  
 岡村 和躬  
 小川登代美  
 森本 幸美  
 小野寺朱美  
 中西 敏子  
 小原 子川  
 有澤 春江  
 大岸由起子  
 小松 隆之  
 山崎かつみ  
 森本真理子  
 小松もとみ  
 高野 和一  
 山下 弓枝  
 大石紗智子  
 西尾 玉喜  
 伊藤 清子

行きかいはほのかなにおい茶たんすの夫の写真の前の水仙  
 やがて雲はとりはらわれて月の無き夜を流れる星ふたつ見つ  
 恐ろしきウドンコ病に立ちむかう正月二日イチゴハウスに  
 朝の月に黒雲うすく被ひゆき急ぎ行く吾等雲はまた去る  
 カンボジアバナナの茎で紙漉くを我は教えて石臼使う  
 籠の鳥ヒーホーホッホと声とほる霜月夜明けを目覚めて暫し  
 不幸とも思はぬほどに暮らしをり喪が明け迎へし元旦の朝  
 ゆず種にて友の作りし化粧水顔に叩けば香気ただよふ  
 携へて花咲く黄泉路巡りるむ被害加害の遠き事故を想ふ  
 薫しべに連ね通せる切り干しの大根かわきて風に遊べり  
 冬の空わが畑の上にひろがりて時に飛行機、鴉横切る  
 橙の果汁を吸ひてゆずり葉のみどり光りて三宝に映ゆ  
 賜りし超特大の大根なりいかに料らむ抱きて悩む  
 春を待つ花芽を庇ふわら帽子あちこちに並ぶ山里の冬  
 新春に皆揃ひたりと師は笑まふ急ぎつつ入りしヨガ教室に  
 名を呼べばスキップしつつ飛んで来る飼猫「くり」は私の家族  
 六枚のカラー賀状の子供らの明るい顔に明日を夢見る  
 川岸の草のみぢに飽きたらさず行きて夕ユラの咲きつぐひと木  
 こと切れし弟を背に立ちすくむ原爆の少年をいくども映す  
 綿虫のまいし夕ぐれ冷え冷えと過ぎしトラツクの杉材匂う  
 子等帰り年末年始の疲れでて二、三日休む新しき年  
 これしきと上る脚立はことなきにこの手届かず熟れし八朔  
 仕舞風呂一番風呂をわれは兼ね紅白の余韻抱きて浸るなり  
 ニューギニアの地震の津波が来るメール波打ちしぶく室戸突端  
 ※俳句・短歌の応募は、企画課内広報委員会事務局まで。  
 なお、選者の添削を不要とする方は添削不要と記してください。

古谷 由美  
 佐々木真里  
 小野川恵仁  
 都築 初代  
 宮地 亀好  
 坂上のぶ子  
 大石 綏子  
 門田 明子  
 北村佐喜子  
 公文 正子  
 高橋 章  
 武内 弘子  
 竹村 咲子  
 出原 久子  
 古川 安子  
 松中 賀代  
 有澤 泰子  
 佐竹 玲子  
 山崎 緑  
 尾立 かよ  
 横田直加子  
 竹村 稔美  
 法光院俊子  
 楠瀬兵五郎